

幼児の色彩感について

—配色の場合—

細井繁子 水野寿子 (名古屋聖霊短期大)

本研究は昭和52年2月聖霊短期大学紀要に発表
した研究「配色の嗜好性に対する学際的考察」に
対する続報である。そこにおいて被験者が選択す
る色とその色をもつ対象物とが被験者の意識の中
でどのように密着しているのかということがしば
しば問題になった。幼児は、『赤はいちごだから
好きだ』という。しかし、すべての幼児が「赤は
いちご」ではない。一般に、女性には色彩の好き嫌
いを問われると、自己の服装に関する連想を行
う場合が多く、男性は女性に関連した連想を行
うといわれる。それで今回の研究においては、上記
の場合と同様に衣服における色彩の配色を中心に
実験を行なった。中学生、短大生に対しては、衣
服における配色のみを扱ったが、幼児に対しては
、それ以外に帽子と旗の絵を使って、対象物の変
化によって結果がどのように影響されるかを調べ
た。色の好みを変えることは決して容易ではない。
この研究は方法の妥当性を検証することをもそ
の目的としている。

I. 実験目的: ①、衣服における配色において、
幼児が中学生及び短大生とどのように異な
っているかを調べる。②、対象物が異
なると配色の嗜好性に差異が見られるかを
調べる。③、幼児の配色における
色彩感を調べるための方法を考察すること。

II. 実験場所: 名古屋市昭和区にある聖霊幼稚園
園舎内の一室。

III. 実験期日: 昭和53年12月から54年2月まで。

IV. 実験対象: 聖霊幼稚園二年保育児64名。年令
4才～5才。聖霊短期大学生75名、同中学一年
生53名。

V. 実験系統、及び方法:

図1に示すスカートをはいてブラウスを着てい
る婦人のモデルを中学生と短大生に、また同じ
ようなスカート、ブラウスを着た子どもモデル
幼稚園児と小学生に、ズボン、ブラウスを着た子ども
のモデルを男児に、白紙に印刷して一枚づつ用
意する。

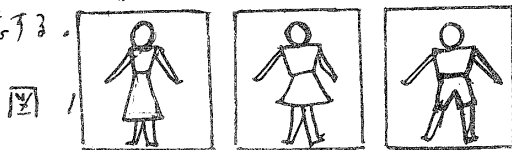


図1

さらに、図2に示すような旗の竿と旗を白紙に
別々に書き、被験者に示すために一枚だけ用意し
ておく。その他に、図2—(c)に示した半分
を黄色のクレヨンでぬった三角形の紙片をやはり
実験者用として一枚だけ用意する。

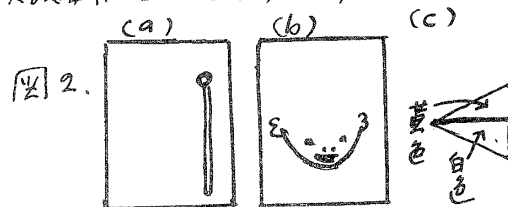


図2

実験はなるべく個別に行うようにしたが、被験
者同志で反応を知らせられないように注意しなが
ら数人合同で施行した場合もあった。

このほか実験に必要なものはクレヨン8本であ
る。ここでは、株式会社サクラクレパス製造のサ
クラクレヨンの中から、青、赤、緑、黄、だい
だい、黄緑、ももいろ、水色の8本を使用した。そ
れは四主色とそれらに属する主色でない色を念頭
にききながら選定した。

さて、実験者はこれらのものを用意して、被験
者とむかいあい、8本のクレヨンをまず示して一
番好きな色を取らせる。1本選んで手にもたせて
から図1に示したスカート(またはズボン)にブ
ブラウスをきたモデルの絵を渡して、スカートを手
にもつてクレヨンで色をぬらせる。ぬり終
たならば、そのスカートの色にもつともあう色で
ブラウスをぬるように求める。中学生と短大生は
これだけの作業が要求される。幼稚園児は、さ
らに、図2で示した旗の竿と旗の絵を一枚づつ示さ
れる。旗の竿の絵に三角形の紙片をのめさせて(図3参
照)“この白い部分はまだぬっていないのですか。
なに色をぬったら一番よくあうでしょう”と問う
。「よくあう」ということが理解されない場合に
「一番きれいにみえるでしょう」という。こ
では、時間の都合で実際にぬらせないで、只8本
のクレヨンを見せて一本取らせて、それを記録し
ておいた。

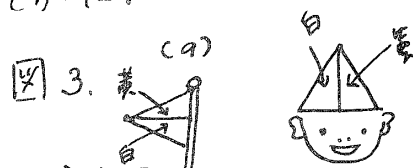


図3

VI. 実験結果:

8色のクレヨンの中から、最も好きな色を選ば
せた結果を赤系統、緑系統、青系統、黄系統に分

けで集計すると表1のようになった。

表1

	赤系統	青系統	緑系統	黄系統
幼児	42%	25%	22%	11%
中学生	13%	53%	11%	23%
短大生	27%	34%	12%	27%

同じデータを主色と非主色に分けて集計してみると表2のようになった。

表2

	主色	非主色
幼児	52%	48%
中学生	49%	51%
短大生	52%	48%

このように8色のクレヨンを使って調べた場合には、第一、第二、第三番目に好まれる色は、段階別に示すと次の表のようになる。

表3

	1	2	3
幼児	ピンク	赤	水色と緑
中学生	青	水色	白と白
短大生	水色と青	赤	白と白

最も好まれる色は、色を段階別に挙げると次のようになった。

幼児：白、白

中学生：緑

短大生：黄緑

男の子の好む色の差を幼児の結果からみると、男の子の第一に好む色は緑、第二は青と水色、第三は黄緑の順になっている。これに対して女児は、第一が、ピンク、第二が、赤、第三が、白、白となっている。そしてピンクと赤に殆どが集まっている。

次に、配色についての結果をまとめると、まず次のことが見られた。最も好まれた配色を各段階について調べて見ると表4のようになった。

表4

幼児	赤とピンク
中学生	黄と水色
短大生	青と黄

幼児の好む配色を三位まで挙げてみると次のよう

うになった。第一、赤とピンク、第二、赤と黄、第三、黄とピンク、黄緑と緑。いま、幼児において第一位を示している赤とピンクの配色が中学生、短大生ではどのようなものかを見て中学生53名中わずかに1名だけにしか見られなかった。短大生は、75名中に1名だけである。幼児において第二位、第三位と示している配色も全く同様の傾向を示している。

次に幼児の好きな対象に行つた三角帽子と旗をぬる作業の結果をまとめると表5と表6に示される。

表5 旗

	赤系統	青系統	緑系統	黄系統
男	4	11	9	11
女	8	2	11	8
合計	12	13	20	19
%	19%	20%	31%	30%

表6 帽子

	1	2	3	4
男	12	10	9	5
女	6	6	10	6
合計	18	16	19	11
%	28%	25%	30%	17%

このことは、黄色と緑の配色に於いて、第一に好まれる色のは旗の場合も帽子の場合も「緑系統」である。黄色と緑の配色に於いて最も好まれる色は、旗では「赤系統」であり、帽子では、「黄系統」である。（もちろん、黄色はこの場合同色になるわけでもない例外があるが）

次に、補色という観点から配色の結果を見てみると、青と黄、水色と黄の出現の割合を各段階について調べると表7のようになった。

表7

	青系統と黄色との両色を隣接した	補色
幼児	3% (64名中2名)	被験者1
中学生	23% (53名中12名)	割合
短大生	15% (75名中11名)	(衣服の場合)

四、結果に対する考察：

1. 赤の嗜好順位については、一般論にいわれていること、ならびに前回の実験結果とも一致した結果を得た。
2. 旗と旗を使った実験の結果は、対象物と嗜好性との関連を示している。
3. 幼児の結果は、現存の「男の子の色」「女の子の色」の区別がかなり明白なことが見られる。